

## 第4節 自己改革の取り組み

もう一つ、是非とも取り上げなければならない資料がある。

下って、1994年12月20日に出された「初等教育学科10年の歩み」である。実際には創設から13年後となるが、1期生が入り、4年後に完成年度となり、10期生が卒業したのが同年の3月であった。その節目にあたり、総括と展望を掲載した、B4版で77ページにわたる冊子で、今日につながるものの、示唆に富

んだものである。

当時の学科長であった倉田侃司先生の手による編集である。倉田先生の「巻頭言」、続いては、「初教の教育目標」を引き、初等教育学科の歴史と伝統を確かめたい。

○初等教育学科10年の歩み（巻頭言）

第11期生を卒業させるに当たって、学科として10年の区切りをつけなければなるまい、と考えていた。すなわち、初教10年の歩みをふり返り、次の10年をどう展望するか、その点を確認すべきではないか、というのである。

そこで、1994年3月1日から3日間、午前9時30分から午後4時30分まで、「集中学科会」を開いた。それぞれのテーマに関係する教員が資料を集め、問題提起をし、課題と展望を明らかにしようと努力した。しんどかったけどやってよかった、というのが会議に参加したメンバーの総意であったと信ずる。

以下は、それを文章化したものである。事情によって、執筆者が交代したところもあるが、これからの初教を考えるには避けて通れない作業であった。5月当初には冊子に、という計画であったが、今日までに延期になったことを申し訳なく思う。これも、私の非力のせいである。早くから原稿を寄せてくださった方には心からおわびを申し上げる。

大学冬の時代を迎え、学内でも、各種委員会が設置されて答申が出ている。8月には、学内研修会もおこなわれた。教員養成を特色とする初等教育学科は、今、存在意義をきびしく問われている。そうした緊張感をもって全員でこれを書いたつもりである。

なぜ、これ程までに「緊張感」をもって、3日間にわたる「集中学科会」が繰り広げられたのであろうか。18歳人口の漸減という状況の中で、押し寄せてくるであろう荒波を予測し、「これから学科として何を守り、何を变えていくか」について、侃々諤々の議論が展開されたのである。特筆に価するのは、本学科は、このように早くから1年間の教育・研究について、いわゆるPDCA（計画・実施・評価・改善）を行い、継続的な業務改善をしていくマネジメント・システムにあたるものを取り入れていた、ということである。

では、「これから学科として何を守り、何を変えていくか」の議論がどのように進んだのであろうか。次の部分に注目したい。

#### ○初教の教育目標

##### 1. 今、どんな学生を育てようとするか

本学の初等教育学科（以後、初教）は、文学部に所属し、教員養成を直接的とする学科ではない。すなわち、幅広く初等教育を学ぶ学科である。しかし、実際には、教職を希望する入学生は、80～90%となっている。したがって、彼女たちの願いに応える教育をすることで、初教の存在意義があるといえる。

##### 2. めざす学生像の変遷

###### (1) 全員を教員に

初教の創設は1981年（S56）4月である。その時の記録によれば、次のようになっている。「初等教育学科は、小学校教員として必要な学識の習得、能力の育成に力をそそいでいる」と。

この点を大学案内はどう表現しているか。初教の目標は「子供たちに親しまれ尊敬され、社会からも信頼される教師づくりです」という。したがって、初教を紹介する見出しも「実力のある教師をめざして」というものであった。

ところが、全員を教員に、というのは現実には不可能なこと。学生の入学動機も変化した。

###### (2) 初等教育のわかる人を

1990年度生（10期生）からは、初教は40人から80人定員になった。それに伴って、初教は、学校教育コースと情報教育コースに分かれることになった。前者は、従来までの小学校教員養成を担当し、後者は、コンピューターによる教育を担当するものである。すなわち、教員になるかどうかというよりも、教育のことがわかる人を育てようという方向への変化である。そのことは、教員養成と対立関係にあるのではない。もう一つの変化は、教員免許状を学生の義務から権利へと変えたことである。権利である以上教職に就かない者や教員免許をとらない者が出て当然のこととして認めよう、というわけである。そのあたりのことを、大学案内では「発展する高度情

報社会に生きる教育者の育成」と表現している。

(3) 主体性, 社会性, 自立性を

1993年は、天候不順・不況の年であった。本学においては、武田ミキ学長から学千学長に変わった年であり、「変革の嵐」が吹いた年でもあった。

変化してやまない時代をどう生きるか、そのなかで初教は何を目指すか。10年前の全員を教員に、という時代にバックすることはできない。というのも、教職の門は、今後10年間で、さらに狭いものになっていくと考えられるからである。だったら、初教のセールスポイントは何か。それをめぐって、学科の話合いが連日行われた。

その結論は、以下の通り。

初教である限り、教員養成から離れることはできない。しかし、我々が育てようとする学生は①主体的に学ぶ人であり、②仲間とともに学ぶ人であり、さらに、③自立した生活者である、とした。①は個人的側面、②は社会的側面からの表現であり、どちらも共通して「学ぶ人」である。③はその基盤である。

こうした人物が教職に就いて活躍してくれることを学科の目標にしようではないか、というものである。

言うまでもなく、本学科のスタート時、関係者は小学校教員養成に100パーセントの力を注いでいた。1学年40名定員であった。全員を小学校教員として、教育現場に送り出すことをめざし、日々の教育がなされていたのである。

それが、大きく変わったのが、この1990年であった。

社会の動きを敏感に捉え、新しいコースを設置し（この時点では情報教育コース。以後、幼児教育コース、教育心理学コースが加わることになる。）、教育体制上に「変化」を取り入れることを潔しとした。

しかし、先ほどの倉田先生の最後の言葉（下線部）に象徴されるように、学科構成員は、当初の教育目標は「普遍」であると確認するに至ったのである。学生として、初等教育に関する理論・実践を考究する。それとともに、主体性、社会性、自立性を備えた有為な人材となること。そのような卒業生を、教職の任務にあたる人として輩出するのだということが、やはり変わることをない教

育目標だと共通理解されたのである。

この精神は、私たちの心の中に、今も脈打ち、生きている。

(岡 利道)